



^ 13
3036
1



3036
1-6

門へ13
3036
卷1

曲亭馬琴編削

新鐫魁本

稿原真琴亭標

刀筆青砥石文

語物續案稜摸

壹名 鸞鳥水 箴語

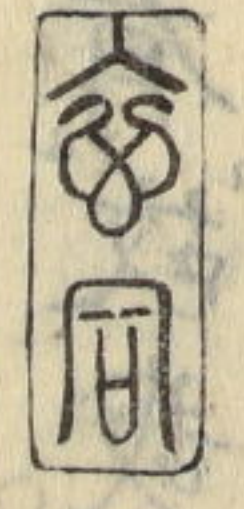
卷六編全

歌川國直繪畫

平林堂藏

布指

刀筆青砥石文鸞水箴語叙



京師標亭氏有裨史之才其所著窻螢餘
譚風月後記二書並行于世客歲又翻案
唐山小說歡喜冤家而寫以國字其書三
卷其文艷麗而异語多矣遙投諸余見求
斤削余素不好為人師况小說乎且齡過
半生憾挈瓶屢空鳥為人畫蛇足之為哉

青砥石文筆序

將固辭言未自宣書肆平林堂知之亦請
族余之筆削刊其書自是之後誅求文造
一則為名一則為利於余何與焉然彼此
往來稍久義不可辭今茲臯月淫雨垂三
旬四鄰寂寥茅屋無容余于時有小恙一
日仰臥讀彼書讀了復思之作者意匠雖
佳猥褻亦甚矣其所相求噫有故哉遂拂

案抽毫叨編削磨研而祛其醜態補之以
勸懲綴之以俚語因故增稿者三卷今以
六卷為全本兩三月而淨書方成迺命曰
鸞水箴語鸞鳳族也詩人詠為山鷄其意
本此文則雖就於余之筆事則出于彼之
意此非可署吾名號者而書肆露之又以
其結局與摸稜案相似私重書名曰青砥

石文云若夫以櫟亭之才猶且欲借玉工之手令倍其價書肆唯取名耳固守株而不移依砥礪以為獲玉兔可謂謬矣刻成之日爰記編削顛末以代序

文政三年庚辰陽月

飯台 曲亭主人撰



新刻刀筆青砥石文鸞水箴語總目錄

第一套 花妻はなつま夜嵐よあらし 時豪ときあかし乃朝霜あさあらし

第二套 藤白ふじしろの春庭はるのちか 洛陽らくやうの倚居よがま

第三套 鴨河うまがわ乃涼床すずとこ 清水しみず乃遺扇こぼれあふ

第四套 妾めかけの初見はつけん参まゐ 鑿くわの鹿嶋しかしま立た

第五套 悠参ゆうまゐ乃衣手ころもて 夏虫あつむし乃封翰ふうた



第六套 除雷の垂榭 山鷄の水鏡

第七套 歸京乃音耗 假梁比涼響

第八套 伎倆比屢價 因果乃車井

第九套 新墓の陷窳 奈芋の篋繫

第十套 人心比追儼 淑人乃吉祥

全本六卷每卷两套編削總目錄畢

刀筆青砥石文鸞水箴語卷之一

江隱 曲亭主人筆削

洛客 櫟亭琴魚原稿

第一套 花妻の夜嵐 時豪の朝霜

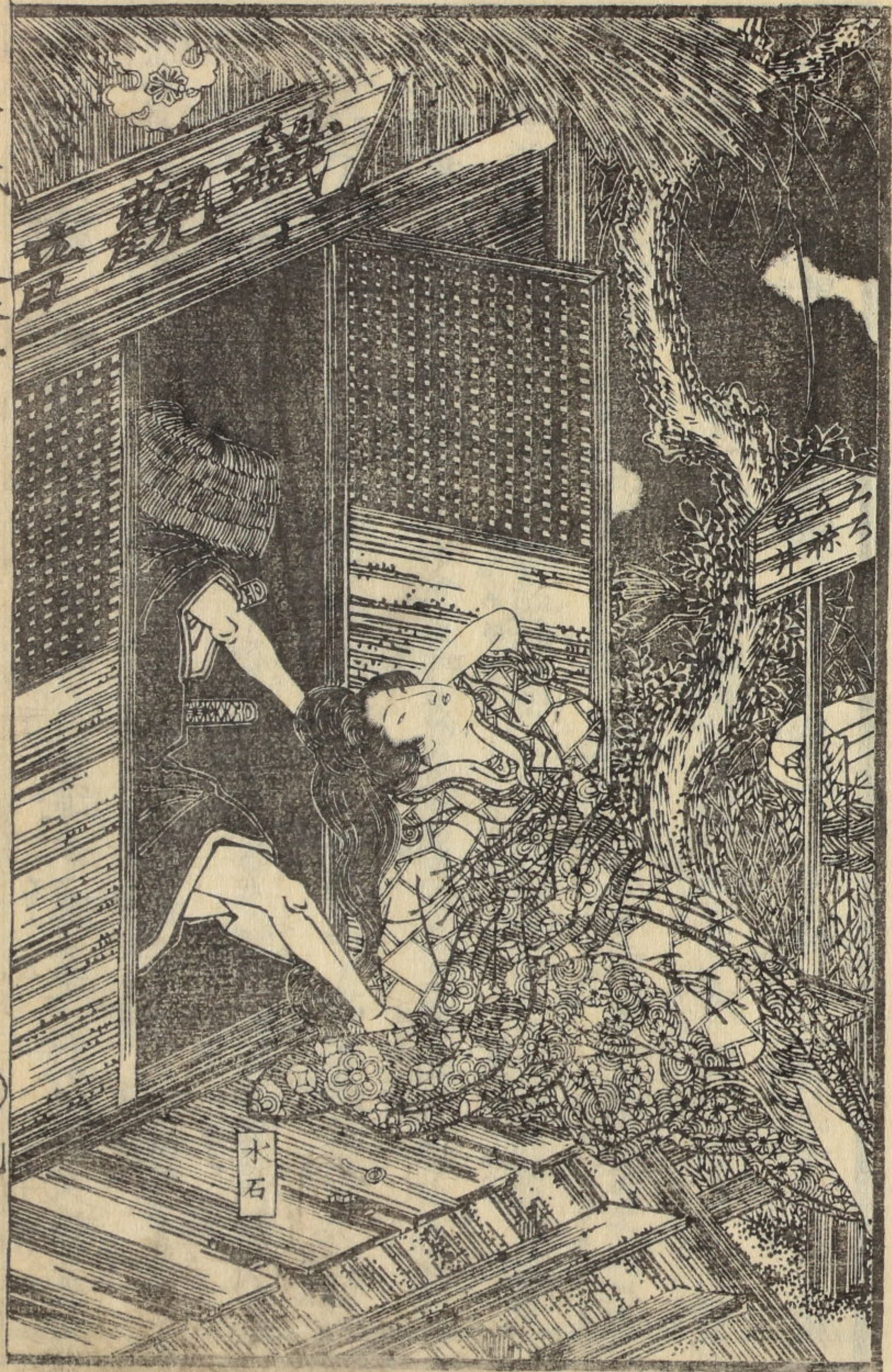
しづめの鏡の池よ山鷄乃影小愛つ色小溺るわかく詠出せ一歌は是の
草紙の大意よと張華が博物志小摠まるるなり足引の山鷄ハその美毛に
愛て水よ映と終日得去る心惚目眩と竟に溺死るとん男女の
相歡ひて彼臭骸を抱きて得去る家と亡身と喪ふ亦これと同ド
かる下。色ハ影也慾ハ水也泡沫無常と悟らむと影は迷ふハ愚るんや。

且説新撰る鎌倉の鐵觀音堂の雪下のほろりあり又新清水の觀音と唱ふ
 此へ是鐵像なれども只大なる首の金軀の崩たりと。俱は扇堂は安措つ
 今へ瑣々ある堂内小あり。蚤が子牧童など首觀音と唱ふのこれ抑
 この佛像の當初は井と掘り土中より出ぬ。よそその井を鐵井と云
 鎌倉十井の一個又説鎌倉將軍頼朝卿の時北條時頼朝臣執權と
 青砥藤綱と寵用。四海の無事ありける。建長元年丁酉の冬十一月十日
 ありし事と云。三更月頃きて霜天は滿七御夜静かて人迹絶る。か折る
 一個の男子。いそ慌る面色。さる女子の手を掖り件の鐵觀音堂のほと
 近く走り来り。男子は廿四五歳。人色白く。月額青く。黒衣赤帶して。

黄るる糸靴の腋刀を挿り。女子は十八九歳。顔は暮春の花のごとく。
 靨いと濃る。膚は仲秋の月は似て玉とも欺くべし。目も溢る秋波も憂を
 含め。海棠の雨と帯る風情あり。腰は純り。副衿は風小惱る。青柳は尾を垂る
 鳥は彷彿と。縫箔裾箔のうらある綾の桂は緋の纈の衣。真白の衣三放四襲る。
 金襴の帯の端地を曳き。小解んと。糸結びもむと。棲らる。踢はく裳
 取次氣ま。かくてこの男女は齊一吻と息をつら。後方遙小んり。女子は
 涙さ。将場の野鷄の羽を傷。さやく脱き来つ。とも。復も追隊の
 蒐りや見。ともかくとも漆遂。その御堂を死所と契。ア。の虚言。秋
 り。甲斐るや。と怨む。男子は背を撥。その口を覚期。のみ。只

共侶もと逝水の中を堰きて形も恨む世もあらず。死天の旅宿の遠も
 安樂國と聞かば冥土も後安き外も夜嵐は散る可憐花も
 他の眺は遺るの媚。よとて草を折布てついで俱は合掌し觀音堂をぬかむ。
 念仏十遍む唱つ。やう女を殺さんとて刃を抜んとする程は追隊の雜人簇々と
 東西より走り来つ。月を燭は透し見て彼處よりと罵動揺めれ手少く
 棒と取る得て打倒さんとて競うて蒐く。男子の信と見かへて再び追隊近づ
 たり。殺拵ごとて死を急ぐ。寂期の本意を遂かとう。霎時彼御堂のやうに
 隠まき俟ねを引立て女子を後方は推遣う。刃を晃りと抜閃う。長勢を敵手の
 死物狂ひ面もゆるげ進み逆へ彼打仆せ叫ぶ。雜人の事あれば刀小怖とて

合期せむと思つても殺されて左へ靡き右へ靡き田るのよとて近づくのぞ。
 只置々と柵揮して武藝は疎き一個の敵を拉ぐと得るが竹う雲も入る
 月の朦朧とる。隨は同士撃つてれば遂は堪へど一祥は咄と崩れとて
 逃走を何處までりと追うる。女子の光景を合に危く臆消て慌忙
 觀音堂は身を躲さんとてつとつとも。夜は守人ゆたかたを不荒る小堂ありけむ。
 扉斜に傾き引もく早に開き。こいつおせんとなり。小困り果てせんべ
 志とてか俛其知は惘然と。浩処は思ひつ。堂内は人あり。緋の趣を
 詔たりん内より七片扉を密とひひつ。声もかけど矢度女子を抱き宙に
 女子のいづ騒と吐嗟と叫ぶ口は手を掩理る。内より引入して扉を楚と闔るに



めん女子の頻りよ叫べども既ふが情郎の仇を追を遠は走りぬかる時又誰も来て
 救へぐもあつたに侶は離れ由面の雁のや鷹ふ捉ま如く組伏せよとて
 今さらんせんごやあつけん音あくむる声せぬありぬ早く件の女子の解れ
 帯を引ながら物別れを走り出口喃々と嘆き手の中帯を締めて折る一個の
 老人追蒐来てその水石をわびやと呼びけりて多々さま欵面目やとむるに
 逃んとて疾走り懸りて帯の所結引留め狼狽物奴親とを逃る追隊は捕らぬ
 ぞく来よと引立て足は信して將て邁ぬ當下件の堂内より一個の男子頭を出
 遺憾げ小目送るその人の年紀骨相廿五の壮佼の瘦突みと色白月額の
 迹五不許延黒とて天鷲絨は似る身は皂と蛇栲の衣の下睡なる派

一領被て片手巻ある鞆糸の垢は光りて斑は断る両刀を腰はとられは是
 武士の浪人多くかくてこの壮佼の手よりける簪と月は翳してとんからんつこ
 彼女子が堂内は遺せぬ拾ふる人頻り獨點頭のも月思ひ捨がしてや
 迹を跟んと進む程は蕉火をぬり照して人影来まれば原素再度の追隊
 多べ喧嘩の側杖打き下とて中も途を横ぎりて藤澤のかと走りぬ
 する程は己前の男子の勢ひ小任り只管小追撃して五六町走りぬ追隊の
 中は二人をう得るものゆゑ急地は声と激し逢さ人々の逃足も三百六臂
 わつあもゆぬ敵は僅一人あるに逃る疾手柄よとてこの足場はよれど共侶は
 取て返して打仕はるやと頻り罵り辱むれば衆皆これに驚きれて齊一足と立

あり。咄と嘯て打閃く。棒ハ冬野の枯尾花の風を煮くより。盤がら勢ひ
 當りかければ。男子ハ思ふも長途せ。後悔も立よもね。透と窺ひ逃んと
 する。追取籠て撲程。遂に刀をうち落さん。腕と折れ。頬と打傷られ。滾々と
 去て流る。鮮血ハ蘇枋の陶と傾る。血ハ。忽地ハ仰返て。半死半生のけと。
 奔々と縛めて。又蕉火をぬり照し。生虜と牽立て。衆皆觀音堂の邊。未つ
 復彼女子を捕へて。堂内堂外。いづれも樹と敲き。草を拂ひ。ところ。八方遺もあ
 部して未獲。まごも。その往方もある。よみけ。又ハ。只男子と劇搦。回て女子の
 所在と責問ふ。痛手の苦惱。堪ざらん。果敢々々。あハ。得答も。只觀音堂
 觀音堂と。むらりに。定う。あ。さ。程ハ。鶏鳴曉と告る。あ。衆皆一処ハ

うち聚つ。まづ。名主人。小由と告て。再び女子と索んとて。件の男子と追立。ぐ
 辻町のかへ還り。抑この一條の情由を詳ふ。小彼淫婦ハ水石を喚れて。鎌倉
 米町の破落戸。佐栗。父平が。女見ると。湯治といふ。の懸想。つ。夥の金を費して。
 ち。比娶り。せ。女。田楽の鼓拍。蘆頭吉といふ。浪子ハ。水石ハ。奸夫あり。け。今宵
 竊出。せ。也。只。彼。水石と。女。淫。せ。觀音堂の浪人の。ま。ま。定。不。聞。を。
 水石。か。蓋。て。秘。し。ん。べ。この時。鎌倉の。辻町。ハ。嶋影屋。湯治。とい。いと。富饒。の。町。人
 あり。渠ハ。紀伊國。海部郡。藤白山。の。藤代。の。蔵。あり。醫師。某甲。が。家。子。ふ。て。本。姓。ハ
 名草氏。あり。そ。が。舊。里。ハ。劇。齋。とい。ふ。弟。只。一。人。あり。湯治。ハ。醫師。の。子。あり
 とも。是。採。る。と。嫌。ひ。二。親。身。ま。が。り。比。家。督。と。弟。劇。齋。ハ。讓。與。へ。れ。

その換やそ親の遺財を残り。懐かしく京小出て熊野人參を賣りてお小。
 一年の病煩ふて辛く本復志つことも。遂は本錢を喪ひて世に便著なく
 ありけし。舊里の身小金五兩借んとて藤白へ消息せし。劇齋つやく承引せ
 られ。終は二十石の莊園を譲られの。亡親の遺金八和君が搦獲ふく出
 らひふ。次用盡せりて進らざる。錢のつやの恥せざる人小と辱めあつ
 回報して京の飛脚を返さけし。湯治の恨憤を安らぐべしとも。勢ひ争ひ
 かたれ。俄頃京ある家を毀て鎌倉へ赴き。雪下の辺る裏借屋は膝を
 容きて。幽る世を渡る程。そが鄰は見立千賀右衛門といふ浪人あり。妻を
 近屬身よりて。盲目の女見一人あり。その名を浴當と呼びて。今茲廿歳は

るなり。こは彼此の少女小。筑紫琴を教るもの。さる生活るは似と。一個乃
 下女を使ふまは。貪りかたむてええりける。然る親千賀右衛門素より此の
 貯祿あり。高利の小金を貸出と。その利子月々小入まは。かてその次の年此夏の
 比千賀右衛門の時疫を病臥せし。旬小餘まり。湯治へ合壁の事ある。捨
 かて朝夕の安否を問慰め。且折々夜仰て湯液を勧めるとせり。親子を
 聊慰めいと。憑りて。ある有。夕千賀右衛門の病些間あり。折々湯治の着病
 とて。その甲夜より来まは。且千賀右衛門の病は枕辺に召近つけて。密に
 其。其齡六十はありて。その大病は。更なりぬれば。瘡もあむ。いふせん男見
 り。又さる親族あり。かろし後の後。心は。浴當が。の。渠は年二十の

と死痘瘡の餘毒ふりて。兩眼失明。僅に琴を操持して少女ホと聚合るのみ。親
 るがごとく今の如く世とさると難く。これ有財四十金あり。又貸出せし金
 七八十兩あり。又年を歴て返らざり。手實數十通あり。これと和殿は譲ふ。願ふ
 浴當を妻中てその替女を瓜憐るる。歡びこれなまるとや。和殿の心いづかやと
 他更もく相譚へ湯治へ聞て一議ふ及む。仰けりひぬ某の紀の山家ふ
 生じて曩も都は出れども。趣舎を捨てて本錢を喪ひ去歳よりこの地は流し来つ。
 辛くその日を送るの絶て助る友なり。人かましくおられし。令弱を妻して。
 金夥附属人と宣とを推辞んや。大恩を稟るもの。誰れ他はよふべし。心せられ
 浴當の生涯見捨ゆべし。と誓ふが如く承引せ。千賀奈門歡びて。聽て女見を

呼して云々と告ぐ。浴當も亦歡び。ともかものと應たり。かくてその次の日。
 黄道吉日なりけし。湯治浴當は婚姻の盃の形むろり結して。近辺は
 婿の披露つ。貸する金の手實書改るる。その夜千賀奈門の
 身もろりけり。その中陰果。比湯治へ間の壁を抜て。此彼家作をひろり。或
 その金を貸出。或千賀奈門が貸する金を債するもの。昔鋭とふ時運も稱り
 けん曩も捨物せず。舊手實書を忽地は埒あて。僅一年むろりの程は有財
 四百兩ありぬ。そ次且も遊せ。千賀奈門の時より。利子を重て貸出せ。ふ
 兩三年中て千金及べり。これより辻町は敷地廣き家庫を贖得て移徙して。い
 福あり。奴婢八九人を使ひ。いと花々々栄る。されば湯治へその隨ふ富は驕も

甚くして早晚恩を忘る義は背に女房浴當が贅女ありと朽を臆
 不えて疎むるのつれづれ只強面の音待してさる失ぬるの甚く
 責罵の刺奴婢は分けて日三の食膳も果敢々々著とせむその
 身は美酒嘉穀との契へ飽飽と近きことふ妾宅を構せり其如
 なひくは浴當いと怨くいと妬くも身贅者のかたき争ひも
 勝る。この屈して氣は患の憤りのあまら半。背は癰疽を来て病を
 百日許竟まむくかりにたり。その死にせし時いといふ声震し今
 この家の富饒あるのみ親の貶あるも身ひらして疎果てかたきむ
 せ。恨しぬ夫の心る。その金のわん限り。崇るやと罵りたり。湯治のれを物

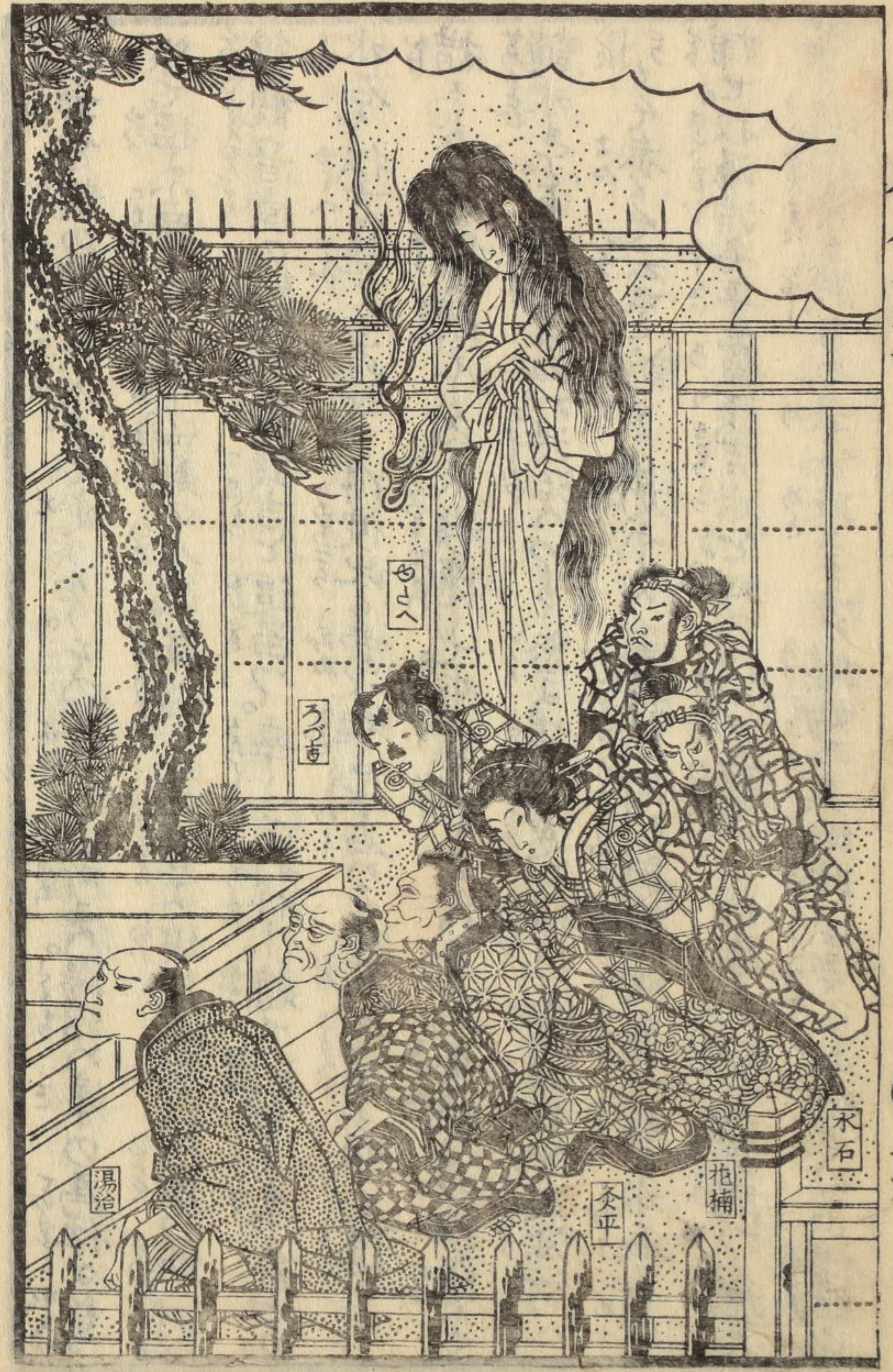
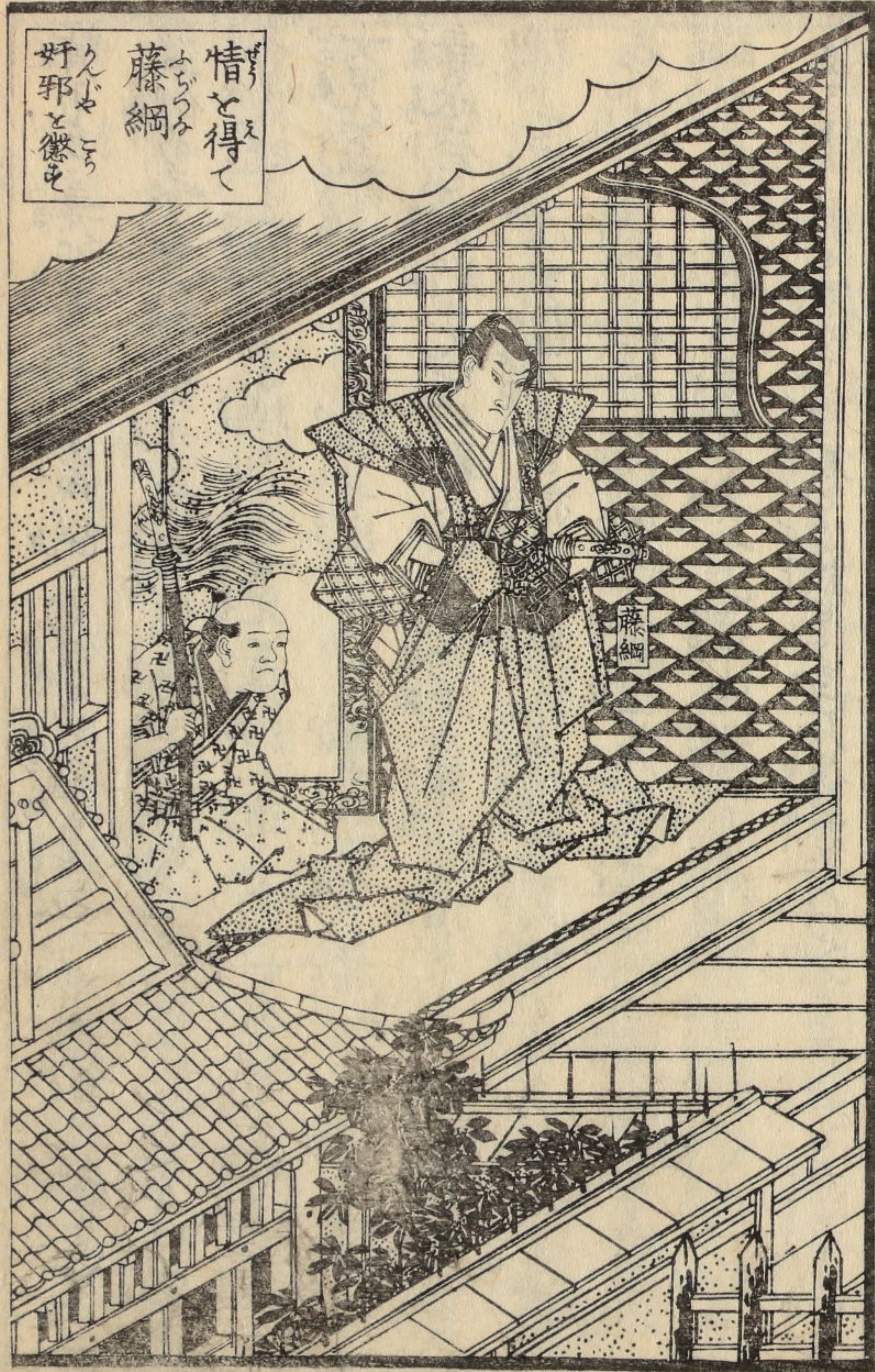
ともせだ。妻ありて程ゆる。彼外妻を引入居ると二ヶ月づつあり。その
 妻も頻死となり。この前妻の祟あるとも知ぬ人もあり。あ時湯治が舊里
 あり。身名草齋のその醫療行は。賸兩年の早損水損を。干原の莊園も大に
 皆無る。けしは困窮は。且又逼る。づれ兄の鎌倉まで發進するの趣。
 紀の藤白へ聞へ。此の金を借ん為湯治許消息せり。當下湯治の刺齋が
 未状と讀も果さ。うら腹とを。撲地と擲。これ親の家子あるも家督を
 承は譲り。よ。這奴足る。と疾ま。放る。白物も貸銭も。罵辱め。回報も
 せ。その飛脚と返さ。ある。件の飛脚。日ごろ経て。藤白へ。飯著。湯治が家の
 富饒ある。その緯の為。体且その。いつ。と疾。明。地。告。刺齋怒。得

堪どて只管罵の亦是まばりる。んが湯治ハ藤白の飛脚を
 ち追立うして獨呵とら笑ひ。都て窮せ時劇齋奴がつまら。そ
 の返報をけいこま心地よ。ひらうごう。誇りかて又湯治ハ
 後妻を要らんと。此彼と相譚へも標致を擇ぶのな。その賈財を望むの
 少るぬ。前妻の祟あ。風聞かきあな。婚姻まう。整六と銀の
 寤寐慰め。て近き。町の藝子水石を呼ぶ。淫婦許かひ。扱の
 水石て小女の父ハ佐栗金平といハ破落戸あ。れば定め。活業ハた。只
 賭突との好。又その母ハ花桶と呼。ていと頑置。た老婆なり。これ
 水石ハその顔色十二分の趣あり。まが為。ま。いと焦。錢を費。の。妻か

中ハ湯治ハ殊。と。管よか。ひ。水石もその錢あ。て。浅。だ
 欺待。湯治ハ。愛。び。娶。や。と。も。その親の素生。い。
 せ。と。躊躇程。父平ハ賭突ハ負。その債を贖。為。湯治ハ金五兩を借
 一。異議。あ。貸。は。是。を。て。或ハ水石を。て。或ハ花桶を。て
 借。辞。その度。毎。ろ。う。貸。既。も。や。五十金。及。ぬ。湯治を
 豫。計。り。今。の。程。あ。ん。と。是。よ。り。且。水石許。赴。手。實。の。期。月
 過。と。俄。頃。人。を。遣。て。件。の。金。を。債。を。日。の。つ。た。び。とい。王。級。ま。は。金
 此。ハ。難。法。て。ま。い。ひ。一。日。を。懸。と。欲。も。聴。り。その。返。を。金
 あり。水石を。遣。せ。り。ま。の。借。金。の。別。は。五十金。を取。と。金。を

買る女房あれが交平夫婦のこゝろを冒姑こゝろのさげ二親共ふろが家へ
 生涯足ふとせむべしと承引が五千金の借財と棄捐ふと。又五千金を得る
 とたひ此彼百金の益あり。推辞が目今速に五千金を返さず。両方とも承引が
 官府へ訴せしめて辛きめんせんといはせたり。交平夫婦これを聞いて腹た
 ざども。やう一旦と凌ん為よ。よろづその意は任つ。送は手實を取かりて五千金
 引替ふ水石をかく遣りたり。かく湯治のさひのまふ計りて水石をよびさつ。あそ
 こに寂妻中て寵愛挿頭の花の如く。衣裳調度櫛笄。みなその好ま任され
 ども。水石へ豫より。蘆頭吉といふ奸夫あり。且湯治が貸財の質ふとて逢く。あそ
 取りしといと朽とくあふまん。この日廿二日。蘆頭吉と謀合して夜は紛ら。潜出

遺書を親の門へ投入して走り。その夜さう辻町へ湯治の事の為体は驚
 怒て猛小野ホと呼走。四鄰の人さへ駭催して只管は追せ。その二隊の雜人們へ
 鐵觀音堂の辺あり。蘆頭吉と追留つ。辛して打仆。臆て引さる来んども。
 水石が往方絶てまねど。あは彼此と索。程は水石の親交平がぬく隠し
 措るより。分明は聞え。人夥遣して水石を出せといはさふ。交平のまげと陳ど。
 謹求もいも跡与さぬ。湯治のい。怒は堪む。遂は件の蘆頭吉と文注所へ
 引りて赤りて云と訴さる。是ふより。青砥左衛門尉藤綱奉て猛は水石を召
 捕せ。叔湯治交平。蘆頭吉水と坪の内へ召聚て。その事の趣を質問。書を
 ぬり立。九貴も賤さる。妻を取るふ。媒妁あり。納聘は妻少あねもい。借財の



青石入巻一

七六

質小とて。妻と娶りし。の久聞を。呪て舅姑を遠離て。婿の家は足らざる。と
 り例あべ。やながれば。水石の湯治が。為正の妻。ことわひか。さうけ。とも
 灸平の既。夥の金。は換て。その女児。を湯治。遣。その奸夫。と走。る。及。び。て。途。よ
 女児。と奪。去。り。ぬ。く。隠。し。て。出。た。る。の。罪。蓋。頭。吉。と。等。た。り。の。か。れ。ば。湯。治。の
 妻。水。石。を。離。別。し。て。その親。又。返。せ。又。灸。平。の。湯。治。は。借。り。し。る。百。金。を。返。さ。し。送。り
 陳。と。遲。滞。せ。ば。四。人。俱。は。獄。舎。に。繫。ん。又。盧。頭。吉。の。腕。を。折。れ。鼻。を。打。傷。れ
 ち。是。自。業。自。得。の。も。人。の。妻。を。竊。出。せ。ば。その罪。死刑。に。當。り。し。る。も。今
 解。示。せ。ど。く。水。石。の。湯。治。が。妻。を。正。の。妻。に。あ。れ。譬。へ。百。金。の。貨。物。の。如。し。
 ことより。罪。を。宥。め。鎌。倉。を。追。放。せ。し。る。これ。舊。思。わ。れ。ん。も。この旨。を。承。奉。と。

嚴。に。提。つ。水。石。の。囚。を。免。れ。て。その。日。の。廳。へ。果。お。り。か。れ。ば。佐。栗。灸。平。の。全。く。評。訟。小。負。し。る
 ろ。ぬ。と。曩。小。湯。治。より。受。け。り。五。十。金。の。も。賭。突。打。果。し。て。今。の。碎。金。一。粒。も。遣。は。し。る
 況。前。借。の。五。十。金。と。共。に。百。金。火。急。の。調。達。不。困。果。て。水。石。と。大。磯。へ。遊。女。を。售。つ。身。價。八。十
 金。と。得。た。れ。も。廿。金。を。得。足。ら。ざ。れば。渠。が。飾。粧。の。具。は。さ。る。家。は。わ。り。と。わ。物。へ。戸。襖。席。薦
 銅。金。を。遣。わ。り。沽。却。し。て。や。や。負。合。し。る。その。金。を。返。し。け。り。さ。れば。湯。治。の。今。ま。に
 金。の。返。り。を。歡。び。と。水。石。を。離。別。せ。し。る。の。と。惜。き。限。り。あ。れ。も。既。に。文。注。所。の。沙。汰。あ。れ。ば
 異。議。あ。り。金。を。受。け。り。去。状。を。取。り。し。る。と。緯。既。に。和。譚。ぬ。よ。り。て。事。の。趣。を。文。注。所。へ
 聞。え。わ。け。て。もの。急。状。を。た。て。ま。し。る。湯。治。灸。平。の。咎。を。免。れ。て。蓋。頭。吉。の。形。の
 如。く。鎌。倉。を。追。放。し。る。さ。ん。ば。又。灸。平。夫。婦。へ。播。銭。樹。と。あ。り。ひ。て。水。石。を。妓。院。へ。售。ら。

わづらと心わづらひのへいひたり。かくその次の年。二秋もたや。魂祭のころあぬ
 この月の十六日ハ浴當が一周忌日あれども湯治ハする用意もせど魂棚のこ人
 るまよどの形むり終造と饗膳あど。下むもそるむ夜毎ハ燃と燈籠の
 油のたく費るとそ。そ次うち滅とるのそ必り手づり。浴當が稱月の
 健夜も。湯治ハ甲夜より燈籠の灯を滅さんとする程は丁子頭發と飛て。
 左右の眼ま入り。吐嗟と叫て掌拭ふ。眼中痛と堪り。晝夜睡は就ると
 既ま名三日ふと。僅ハ苦痛の去り。と腫推け。臉爛て遂ハ兩眼共ハ瞽る。
 是よりよめづ短氣ふと。奴婢と吐り罵ると又。日ごうは。只
 是のころ。とくわぬる。口を。頻又入のれと。呼ぶと。外へ出ると。

入夥推かりて。辛く禁るものあり。程ハ秋暮て。名十月のぬ。
 湯治ハ。日小敷を召て。貸手實を納り。皮籠と。つら。披。夥の
 手實をひとり。火鉢の中へ入。小敷の。驚と。禁と。及。と。
 數百金の貸手實立地。烏有。ぬ。湯治ハ。な。件の手實の
 るを問。小敷ハ。と告。を。酸鼻。の。覺。そ。
 汝が。焼亡。する。む。ん。舊の。俵。出せ。と。出。と。敷圍て。火箸を
 りと打。と。小敷ハ。再び。驚。慌て。も。其。知。を。避。是。より。湯治ハ。病重て。
 手實を。喪。ひ。る。の。と。惜。と。泣。て。貸。る。金。の。證。の。は。誰。その。金。を
 返。す。と。家。送。は。衰。へ。貧。を。待。今。も。死。と。挫。撈。て。腕。力。を

青砥石文巻一

二

半抜死と看病人ホ抱禁めて奪つてその刃を隠しこの夜ハ奴婢ホ西人
 かつては衛てなり一ハ更闌るまゝとつても要時食目睡む程ナ湯治ハ
 臥簞を抜出て長押し帯を投りてみづつゝ経きて死ふなりその死奴婢と
 鄰人の夢ハ浴當の帯をうち掛て湯治が頸をかちけハ千賀右衛門走來て
 忽地ハ縊殺せり。冬平花桶ハ傍より主婦齊一手を拍て歡び笑ふなり
 け。かくて奴婢ホハ夢覺て駭駭げどもその甲斐あり。そのあづまの天明て
 四鄰の人ハ告又里長ハ告るども前妻浴當が親族のまゝ又湯治が親類も
 鎌倉ハ絶てり。只紀伊國の藤白多。名草劇齋といハ醫師ハまゝ湯治が
 茅あるより租知するりのあふより。馳て飛脚を遣つその飛脚ハ日お経て

藤白の里へゆきて云々と告るども劇齋ハその人共侶頗ハ路次をいそがしつ。
 十月の中流ハ鎌倉不到着して奴婢鄰人ホハ對面せり。され湯治ハ横死せり。
 うち歎く氣色ハあて。その遺財のり込のそ。嚴ハ穿鑿するハ大約七百餘兩
 あり。又貸出する金ハ湯治ハ手實を焼捨れハ定ふことと知るのそ。劇齋
 奴婢ホを疑ふ。文注所へ訴るハ虚實分明あり。とどつゝあなれども豫々
 高利の聞えあり。愁ハ訴てその咎ハあひゆせハ毛を吹て疵を求るふんとどひ
 へて遂ハ果さず。借るものハ高利せうらみて手實を焼きハ幸ひハ知れ
 負してせぬものハ且その損奉て数へハかど。志んれども母家庫あり。
 衣裳調度家具雜具多し。みることを賣んと。此彼と相譚ハ。三百餘金ハ

買んといふの第一番の得意なればその商人は札を落して明日受授と
 決りてその夜丑三の比及は庵厨より失火して彼衣裳調度家具雜具の
 ごとく土庫より猛火入りてとて湯治が布地の中へ塵も遺さず焼亡し
 とも幸やして延焼せざりて當下劇齋へ彼遺財七百餘兩を懐かすもの
 慌迷ひて走り出辛く煙を避るものなり。翌日必金よまざる三百餘兩の活物果敢く
 灰燼よりありく果して腰を抜さざる悔うらめどもおぼやかり。兄湯治が
 残忍の悪報こゝろのひもむけどこの夜も奴婢を疑ふて彼木の柱の傍るふ此乃
 金と分も興へば身の暇なき取せらるる或の恨み或の諷まら。事を普く世に
 あつてその風聞大なるあり。ある人竊まこの事と青砥藤網は物よりしてその

批評を請ふ藤網聞て眉を擡め彼嶋影屋湯治水に曩よ云々の訴えを
 これを人ともうとまじら。渠の紀の藤白ある醫師名草生の家子ありは家督を
 その弟に譲りて京又出又この地へ来て猛富なるものあり。さればその譲は
 ちと利得の為やて吳の太伯の辞讓と異且その家跡を更めて嶋影
 屋と號せしこと名詮自性なり。譬は嶋影の嶋と分は山鳥の影とあり。
 彼湯治のまんとてか邪智を愛して禍を醸せり。方是山鶏が美死毛とて
 愛して水は濁さず死さるか如し。さればこそ水石といふ淫婦は悉溺して計りて
 一旦娶りしことも是よりその家乱まされ水石の則石あり水あり石あり水は浅ゆ
 湯治が怨の影とらして溺せりといひ。且湯治が残忍者畜りて家を富し。

身と肥との多しハ無病ナリ温泉ニ遊ビ飽マシテ淫酒ヲ恣チテこれを保養と
 以テ如ク保養生ヲ為シテ命ヲ削リテ彼湯治ハ名草氏ノ名草と
 慰ト和訓近ク所謂湯治ト云フ其の意其の益ある事亦是名詮
 自性ノあり也又彼見立千賀右衛門ハ其の遺財ヲ湯治ニ與ヘテ盲目ヲ獨女
 浴當トヤリト妻セハ渠モ亦利ハシトシテ同氣相求ルノ既小湯治ハ
 残忍ノ毒ヲ染マシメテ後ノ任任用セズ浴當ハ竟ニ憤死セリ又々
 醫師ハ病ヲ療治スルトク其の病症ヲ診錯テ還テ人ヲ教マシ似テこれ
 又トモチカヘトハ所謂見立千賀右衛門ハ亦是名詮自性有ルベシ又湯當ハ
 湯中ニ浴モ湯モ和訓也當モ中モ有ると訓リ彼瞽女ハ熱湯治ヲ譽メ

志スルより可惜命ヲ縮メテ譬ハ虚症ノ病人ガ其の病症ヲ知ズト
 漫ニ湯治スルハ硫黄ヲ蒸シテ眼ヲ損ジ且津液ヲ涸血ヲ耗テ程モ
 多ク死スル如ク又彼佐栗灸平ハ何トシテ活業有ル只その女兒ヲ淫ヲ賣リテ
 これヲ恥トセリ一もの養生モせず餌藥モ用ヒズいつヤ又その關所モ
 灸トシテ搜灸トシテ如ク熱痛ヲ忍ベトモ其の益有ル恥トセザレバ人ハ
 わざと渠ガ死シマシメテ作セザレバ死スルものと又何ぞ
 異ルベシ又その妻花楠ハ夫トモハ僻リテ女兒ヲ浮氣ニ生育これより
 老樂ヲ過スルものこの小兒ガ母トシテ毎ニ甘ミ菓子ヲ食テ病乃
 發ルモ如ク俗ノ菓子ヲ鼻藥トシテ菓子ヲ食テその子ヲ毒ヲ與

あり花桶と鼻蔡と此彼和訓相近がれは佐栗交平と又その妻花桶とれも名詮
 自性あるべし又蓋頭吉の無用の遊民遂に人の妻を竊るとその鼻を打殺す果に追放
 せられり大丸薬種の頭尾に用るる足ざれば製薬の必棄ことと名つけし蓋頭と
 り渠の無用の遊民の既ふて面部を毀られ鎌倉を追まら廢物ありり亦
 是名詮自性ありとや奸邪貪婪淫奔穢行皆その頑愚の慾火よりて或は
 横死し或は放るいと憐べしゆはとむべ湯治が身劇齋も亦慳貪ありのふこと
 渠天命とぞんぞとて覆車之轍を續と申は又その兄のどくろとと潜やふ
 批評して只顧は嗟嘆せり博く愛して私るはとと仁者の心ありべし。

第二套

藤白の春庭

洛陽の僑居

却説名草劇齋へ兄湯治が遺財七百餘金と一毫も散さざるとは里人小
 別と王口と逃るがどく鎌倉と未明は起て路次とゆふその羊は名暮んとす
 比紀の藤白の里は還りつ長途の疲勞と物もせぬ掃出と煤と共に年未の
 窮鬼と裸て俄頃富饒ありたとも兄の追薦は佛夏をどくろもせぬ
 され鎌倉は旅宿せり日湯治が死するの怪かりへ前妻浴當が祟やと交平
 夫婦が怨もあんな今その遺財此捨て施餓鬼とて靈を鎮めりへと勧るのあり
 まると劇齋へ冷笑して嫂浴當が菩提と吊りて況交平夫婦が横死を憐むと
 ろりけり抑劇齋が人とあり刻薄して辭を好む吝嗇して尊大あり書を
 讀むと好むとへ醫術儒學不暗かへ田舎は稀ある博物とてあるも知らぬも

憚とへみづらうその學問と鼻不被て俗と直下。動もせん古書と引き醫論と
 好きて近郷ある。老醫子と口を聞かむと常人の非とひと樂ふと疾
 われども利の為か己を枉て勢又就ざるも。只是詞章記誦の學あり。
 聖人の大道と學び得るもあらずれば。智術は恥りて訟獄と事と。行状小
 薄くして。術心を飾ると多かり。せんばやを名くより。儒醫とめて名を知ら
 る物うら。尚その技へ行まじ。いと朽をくもひさる。今かう俄頃一徳
 はさく。その家豊まわり。兄弟子若黨といふの二人と奴婢一兩人を使ひり。
 かく物も整ひて。事足るともんえあから。齡二十はあられども。いさ妻と
 のと娶らねば。そが為小幾人。牧媒奴ももあはれ。あねど。一切これを承引ど。

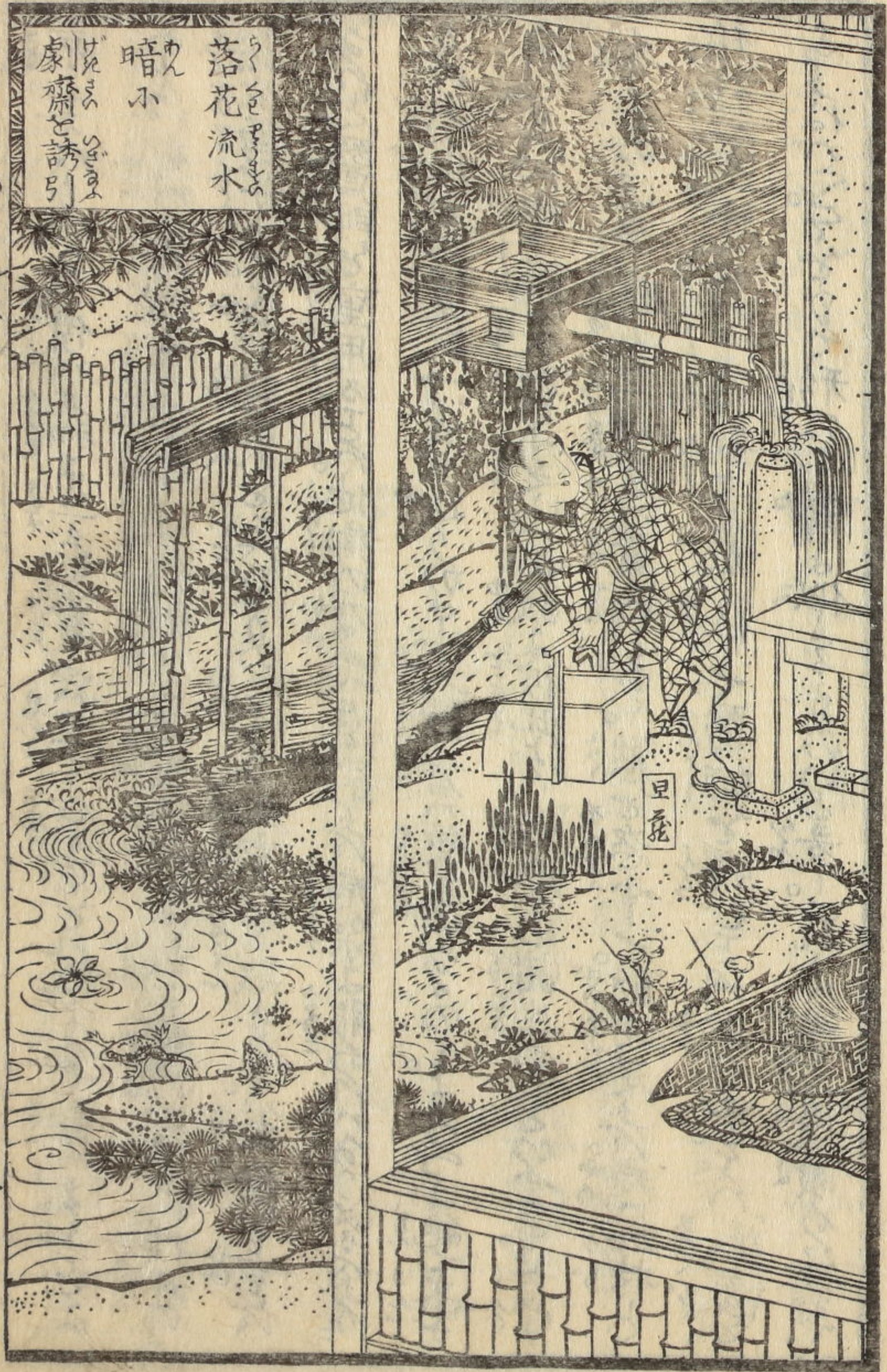
強く勧るものあれば。劇齋頭とやら。掉て妻子の世路の錠あり。人とて
 青雲の志あらんや。いさ。風志を得遂どて。子もさへいで来あ。みづらう
 窮鬼と招く。然でもか。田舎あり。は。稱ふ。婦女子あり。今とて急ぐ
 とらんと。誇貌は辞け。いさ。媒奴も稍精して。あの人。今い豊るんども。女房ま
 のと事と缺く。兄がうへ。や。懲けん。と。余後へ云と。勧るものあらう
 け。かくて。五年をうり。登る程。建長も六年ありぬ。去れども。劇齋が。
 醫術へ竟は行まじ。年来ことを憤り。一日又あ。う。て。や。田舎見
 糞土とのと室と。と。沙中ある。黄金と知らむ。死を起し。生を衛る。療治は
 神ある。の。な。び。經濟も亦國と醫と。這妙手段あり。あ。名。一御の

外と出むいと恨むべし。うらむべし。とひさりごらつて端居をよれば。頃も
 季春上浣青葱心ちある庭面小紫白ふ壺莖杉菜すまや咲出て
 うらうらとたう陽融は遣水もや温く初けん。處得負あれ蛙二三ッ。
 微音小鳴るるさへいと趣ある眺あり。かゝる折軒端は近き寛の水より。
 一葩の桃花纖々と流きて来て居る桶を溢るぬ。水のたたく曲演は。
 流き入つて彼此と。いと奇しく漂ふ光景但見る武陵は世を避き我。
 秦人の隱宅もどく曲水は友を聚へ。蘭亭の下流は似たり。劇齋は
 けしごとと見つ再びさやう。水は漂ふ彼落花は垣の内なる物あるは遠き
 山路は咲る致近き山脚は散る致梢へ定るなれども誘ふ水は任せば。

いつふてそらぐとよの曲演は入るようあらん。かくて又この堰埭を越るは。
 流きて後竟は江も入る。海も入るべし。さ致とそ幹木は勤う安ま
 似れども。終は石滂は根を潤く。よふ滄海のあり得るは空しく
 溪邊は朽んのも。さうらんちの三千年の春秋は値ふとも。亦是何乃益
 やある。そは只落花のそなうと人亦如此あるべし。山の足引の山腹は
 生涯を送るもの。の書と續との五車は過て。その才二酉を貫くも。
 世は名を知らう。よも。終は亦埋木と。ありも果る。丈夫は主として
 甲斐はあむ。陰陽は流る水より急かり。今この落花流水を御導に
 志す。心ひ起さる老て後悔するところん。これを京まね鎌倉やん都會小

出て醫療を施し。名を揚家と興せし。至る。豈快事あり。や上醫の
 國を醫し。その次。人々を醫し。又その次。病を醫し。繞り。五人七人の腕を
 握り。口と餉ふ。それとも醫師といふ。故。今更。ま。つ。つ。と。愧。べ。し。曩。より。ん
 東行して。華洛の風流。を。鎌倉の富饒。を。初。て。目撃。せ。し。日。より。壤。鼻。を。田舎の
 住ひ。を。鬱。悒。多。る。ま。あ。ら。ぬ。累。世。の。居。を。移。して。他所。へ。赴。く。大。事。あり。且。その
 雜賈の。妻。か。ん。を。厭。ひ。の。あ。ら。う。な。り。た。貨。財。の。都。會。は。輻。湊。と。人物。も。亦。都。會。小
 在。る。り。是。長。沙。越。人。は。讓。る。べ。く。も。な。ら。ぬ。伎。を。世。の。億。萬。人。は。施。ん。と。欲。さ。る。も。よ。の
 村落。で。何。ぞ。と。と。る。名利。兩。全。の。謀。は。只。も。な。と。を。さ。る。あ。ら。う。吁。然。あり。と。肚。腹。は。計。較
 大。々。と。決。り。つ。漫。子。獨。笑。して。と。り。妻。子。を。た。と。か。る。時。情。逸。け。且。と。ら。よ。の。と。郷。あ。ら

親類外戚の。ある。や。も。あ。ら。ぬ。れ。ど。劇。齋。八。兄。と。中。馬。が。一。の。め。れ。た。め。れ
 富饒。より。て。よ。う。の。藤。白。の。里。は。處。る。氏。族。ある。も。貪。る。の。忌。嫌。か。て。よ。せ。つ。け。ど。
 又。人。の。世。渡。る。も。俗。物。あり。と。て。侮。り。け。し。六。命。の。傲慢。を。憎。て。胡。越。の
 之。ひ。を。あ。せ。り。か。れ。バ。又。今。更。は。誰。と。相。譚。ふ。の。も。な。り。只。彼。身。子。の。如。小。麩。の
 ぞ。この。三。四。年。隨。從。せ。る。熊。野。且。藏。佐。東。室。八。とい。ふ。兩。僕。あ。つ。け。り。その。め。れ。た
 問。を。書。と。て。の。夜。さ。る。先。室。八。と。召。近。つ。け。て。云。云。と。意。中。を。示。し。ん。今。他。御。は
 移。ら。ん。京。に。住。ひ。く。佳。らん。故。鎌。倉。を。去。り。去。る。汝。且。試。し。し。む。と。も。れ。ぞ
 入。見。下。と。し。ハ。室。八。ら。ち。含。笑。し。て。殊。更。は。あ。ら。ぬ。計。ひ。と。を。あ。い。ひ。今。の
 世。の。人。の。み。る。鎌。倉。を。世。に。さ。る。か。し。と。下。の。め。れ。た。め。れ。と。商人。の。こ。の。も。あ。ら。ん。醫師。



落花流水
 暗小
 劇齋と誘引

旦花



夕花

京はちんものなり。僕は大和は生まど。曩は且く京もとれり。よろて勧めまうとよ
 わる。都へよろづは文字あり。されば世々名醫出づ。この故は畿内へこそ。彼此の
 諸生医学にて名を揚家と與とのまう。且京は貴賤とも。節儉を旨に
 るん。醫師と重用する。他郷のるべし。わら病架は眼われらる。さよ
 その學術ありの。一昨日も送りか。又鎌倉の繁華ある。よろづは絶て文字
 あり。されば學識良醫ふ乏。この故は彼此より。遊學の諸生ありといふも。苦學
 するものほら。稀也。且鎌倉の貴賤とも。慾を恣にして財用足らば病は加持と
 祈禱と先や。或はト筮觀音籤は任て醫師と擇む。必要せむ。その救済を
 あらねば。こそをり。形の。醫は似るものといふ。これら漢文得讀めれば。

國字の方書を秘藏し。香附子の附子。香ひあるもの。とら得鶴。風は鶴乃
 羽。風麒麟血の麒麟の血あり。とらひ。醫師でも人あり。世を渡する。繁華の
 餘澤ある。べき。とも。己を知らねば。愧る。色。その人の權助頭を圓め。權弁と
 改める。ことを名づけて傳盲醫と。原是。屈弱不真のもの。或は活業一
 疎。その親同胞とらり。あま。て。醫者。ふ。も。な。れ。い。ふ。さ。も。も。れ。ら。醫者
 ども。あ。ん。と。を。な。れ。と。され。病架。も。彼此。藥。礼。を。不。沙。汰。ふ。て。百。も。誰。も。未。ぬ
 と。た。權。奪。ふ。も。か。れ。と。い。ふ。自。他。を。傳。盲。之。間。を。合。と。れ。各。づ。け。傳。盲。醫。と
 い。ら。鎌。倉。の。毎。町。は。醫師。も。軒。と。比。べ。と。れ。ば。あ。の。病。架。を。糶。め。て。三分。礼。を
 上。々の。得意。と。する。もの。あ。づ。ら。權。を。病。架。に。執。ら。れ。つ。喫。倒。れ。も。懲。り。ま。ふ。

現京こそとうめれと忘て蜜八と退せ又且藏と召して説示を正初の如く亦試は
 意見と問は且藏聞て眉うち顰めかゝ大事を僕とど論ふべもあなを問きて
 答さうさだへ忠心をたし似し人欽君今夜食は物足るが飽と名利を求ん
 とて父母の墳墓は遠離で京鎌倉は赴さるるが子孫長久の良策といひ
 かごらん利を射るる都會は名を釣るも亦都會ふあれと鄙語ふ一夜
 檢校その衰ふ及びて子孫は乞食なるもわ。大約都會の人情は奢倭は
 押て眞理とものど貨恃て入るとた恃て出る自然の勢ひ積善の家を
 されば子孫繁昌するとの早あることよ由ま。田舎は名利の街衢はあな
 悠寡して俗厚く良賤のく田園ありよろづよ不自由なる故は富も奢倭より



あつてその富を失はば貧乏の貧乏を隨は送は資て遺跡を立まば子孫の長久
 こそよれり。今君が才とめてよや京やれ鎌倉やれ大都會は出た名利
 得るべけども子孫の為にわづら僕はな得が。よくて游学を
 とも。故郷へ還るるべし。比ふありていふも。先祖相傳の田園を遠離住熟
 かひ家宅を捨て他郷へ移りあるるとの物体多くを必ひ僕を君か
 舎兄の湯治ぬと識らねども。彼人の鎌倉を富千金を積むひもその牙
 一期を終むて迹あるもせむひよあふと。前車の覆るを見ておそれ
 何とて来軒と教言は。只是釋迦は法問とある。沙彌が口つれは似て鳥計
 るべいと憚るるへども。よくていふと不忠なる。智者も千慮の一失あり。

由と告別と告田園の里人は預け家をも人は住て年々の所得と定め蜜八旦藏と
 のを従してその他二兩個の奴婢ホも身の暇を取らして。器材調度へ遺も
 る。里近き港口より。海船は積のふして主従三人上乗去るよ折節順風あり
 けし樹々の杪も嶋々も彼より走る心地して着々霞が藤白山長き春日の
 麗よ釣とる舟の楫とて還るそるよ淡路洲真柴の煙斜かりけ
 吹飯の川の漕過て旅ちり海三月盡その日も西は傾く比押照る
 浪速の浦回る。木津川の岸は着つ。又淀船は乗りえつ。次の日乃
 亭午時都三條の邊る。客店は宿投て水路の疲労を慰めけり。
 刀筆青砥石文鳥水箴語卷之一終



タマ

